

二〇二六年度

中等部入学試験問題

国語 (60分間)

【注意】

- 1 問題は、一から三までです。
- 2 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受	験	番	号

氏	名

小学四年生のいとうさなえは、クラス五人の女子グループにいるがあまりうまくいっておらず、一方、クラスとは関係がない算数の居残り授業は心地よく感じていた。そこで、大事なところをわらさきの色えんぴつで書く堀内さんと出会う。

「うかがを歩きながら、いとうさんは校門を出て右に行く？ 左に行く？ と堀内さんにきかれて、左に行く」と答えるとき、じゃあ私と方向がちがうんだなあ、と堀内さんは言った。さなえはそのことばかりとぞんねんなような、でも、話すことを探さなくていいからほっとするような気もした。

「あさ、私、実は六年生なんだ」
並んで階段を下りながら、堀内さんが言った。さなえは、知らなかったあたりをしたらほうがいいのかもしれない、と少し迷ったけれども、正直に言うことにした。

「前にプリント見せてくれた時に、学年書いてたから知ってる」
そして、「ごめんね」と付け加えると、堀内さんは、なるほど、そこか！ とちよっとおかげさにならずいた。べつに怒っているのではなく、「おもしろがっているように見えた。

「私ね、四年生の時にちょっと病気をして、三週間ぐらい入院をしたんだけど、ちよっとその間に算数で〈面積〉のことをやってた期間がすぼり入っちゃって、先生が復習に付き合ってくれたりもしただけど、どうしても苦手だね。六年って四角とか円的面積やし、五年生で〈体積〉を習った時めよくわからなかったし、だから、思い切った四年生からやりなおそうと思ったの」

一階に下りた堀内さんときなえは、玄関ホールを横切って校門に近付いていく。堀内さんは、*自分自身のはこの作品の前をすどおししていく。
堀内さんは、算数のいのこり授業をやっている先生が、小学一年と二年の時の担任だったし、それで行うことにした、と付け加える。

さなえは、そうなんだ、とうなずいて、へんな顔をされてもすぐにはなれることができるように校門の外に出るまで待つて、思ったことを言う。
「勇気があるねえ」
「なんで？」
「だって、昔なことまじにするために下の学年のいのこり授業に来るなんて」

さなえが言うと、堀内さんは、そうかな？ と首をかしげて、じゃあまたね、とさなえと反対の方向に向かって歩いた。さなえは、自分の付き合いが悪くなったことに気が付いているのは自分自身だけだと考えていたけれども、グループの女の子たちはすでに気が付いていた。もしかしたら、さなえ自身が「自分は付き合いが悪くなっているんじゃないか」と思うよりも早く。

女の子たちは魔法を使っているみたいにするどい。さなえ一人が、いつも「なんでわかるの？」と思っている。今日は学校から帰ったらみんなが集まってプリントに行くんだ、と昼休みにさなえに漏らしたのは山村さんだった。私も行っていい？ とさなえがたずねると、さなえちゃん以外の四人で行くんだと思うよ、と山村さんは言った。

今のクラスのグループの女の子たちは、さなえを入れて五人で、さなえは、自分では認めたくないけれども、仲間はずれになっただけのことだ。
山村さんは、男の子のことを考えている時間が長い分、そんなふうにかりさなえの知らないグループの事情を言ってしまうようなところがあるのはありがたかったけれど、どのみち山村さんはグループの中でもさなえよりちよっと立場がましな程度で、グループのことをなんでも決めるゆうきちゃんや大沢さんに、さなえもいつしよにグループに連れて行ってくれるようにたのんでくれるような力はなかった。

あやのとは大沢さんのことで、ゆうきちゃんしかそう呼んではいけないうことになっている。
さなえは、大沢さんにも同じことを言ってみただけだけど、「今日は水色のテーパールを使おうって決めてるんだけど、水色のテーパールは四人の席しかないの。だからさなえちゃんが出来たって座れないよ」という答えが返ってきた。さなえは、

「他のところからいすを持ってきて座つたらいいのはわかるのだけれども、それはだぶん、ゆうきちゃんも大沢さんもだめだと言っののはなんとなくわかった。四人で完結すべき場所に、いすが持ち込まれるのは美しくない。美しくないことはしたくない。さなえがそこにいること、 X では、グループの子たちは後のほうが大事なだろう。」

さなえは泣きそうになるのをがまんした。本当はグループの子たちだつて臆女じやないから、さなえが泣いたら、少しさなえいっしょに連れて行ってくれるのはなんとなくわかる。でも、今日は泣きたくないと思つた。それは、本当は自分分はプリントに行つて水色のテーパールに座つてグループの子たちとおしゃべりがしたいとは思つていないのではな

いかと思つたからだった。
次はさぞつてね、ときなえは言った。ゆうきちゃんや大沢さんは、つまらなそうに顔を見合わせうなずきあつた。行かない、私も連れて行ってどたのまない、ときなえはいったん決めたものの、五時間目と六時間目はつらくてすつどうわのそらだった。五時間目は社会で、六時間目は国語で、どちらも好きな科目なのに、それでもつらかった。「付き合いが悪くなった」ことを、どうやったら「ちがう」と思つてもらえるのか考えていると、頭がいたくなつた。お母さんに相談したら、何か教えてくれると思つけれども、さなえは自分が、付き合いを良くしたいと考えているわけでもないことはなんとなくわかつていた。

今日の仲間はずれのこと、自分がこれからどうふるまうたらいのかというところについて考えながら、その日はみんなが通らない二階のろうかを通つて帰つた。四年生の教室は三階にあつて、どの子もまっすぐに一階まで下りて玄関ホールまで行くのがあつた。さなえはちよっとだけ同じクラスや学年の子の声を聞くのがいやだったの

で、一度二階を下りてろうかを使うことにした。
その校舎の二階のろうかは、窓側が運動場に面して、反対側には理科室と家庭科室が並んでいた。理科室は閉ま

つていただけけれども、家庭科室からはだれかが話している声がいくらか聞こえた。
だれが話しているのかわりたかっただけでも、そのいたらだめだろうか、と思ひながら、出入り口の前をゆくり通り過ぎるふりをして家庭科室の中を見ると、堀内さんと知らない女子と知らない男子が、同じ机の席について、しゃべりながら何か手を動かしている。そのとなり机には六年生を受け持つっている先生が一人いて、プリントの上で忙しそ

うに赤ペンを動かしていた。
立ち止まつてしまつて中のように見つけていると、堀内さんが顔を上げて、いとうさん、と手を振つた。さなえも手を振り返つて、のどがしまるのを感じながら、あ、と声をあげた。
「入つていい？」
「いよ」
うわばきを脱いで家庭科室に入ったさなえは、ランドセルを床におろして、堀内さんにたずねた。

「何してるの？」
「アツカパーをぬつてる」
えぐくんは刺しゅうをして、わくいさんはリプソをやつて、と堀内さんは教えてくれた。さなえは、となり机のところにいる先生のこと気がなつてそつちを見ただけでも、先生はうなずいた。堀内さんは、えぐくんは五年一組で、わくいさんは六年四組だよ、と教えてくれた。えぐくんと言われた上の学年の男子は、四年生のさなえと同じぐらいの身長で、丸い棒を使って電車の刺しゅうをしていた。わくいさんの使っている毛糸は、いろんな色で染められていて、さなえも目印シヨツプで見かけてはしくなつたことがあるの思い出した。

「家庭科クラブのいのこりなの。来週から指あみやるから、これまでのをやつちやいたんだつて」
赤ペンを持っていた先生が顔を上げた。そうなんですか、ときなえはすべての事情を飲みこんだわけでもないながらうなずいた。
「ぬいもの、お母さんがちよっとだけ教えてくれたことがあるんだけど、玉結びがうまくできなくて」

さなえが、ひとさし指に糸を巻き付けて、親指ごよつてよりあわせる手つきをする。堀内さんはうなずいて、私
もそのやり方苦手なんだ。と作りかけのフックカバ―に針を刺して、針山から別の針を取り、机の上に落ちていた余り
糸を通した。

「こういやり方もあるよ」堀内さんは、左手のひとさし指の上に、穴に糸を通した針とかがったほうを上にしてね
かせて、針の真ん中ぐらいのところに糸のはしの方を三回巻き付け、そこを親指で押さえながら、右手で針を前に引つ
張る。「ほら」

玉結びができていた。おどろいたさなえが、もう一回やってみせて？ とたのむと、堀内さんはまた余り糸を捨てて
結び目を作ってみせた。

「えちくんが教えてくれたんだよ」

えぐちくんは、はずかしそうに首を垂くつぎだして、作っているものを少しかくすように体を反転させる。

さなえはその日、堀内さんのフックカバ―の左側のはしをぬわせてもらった。水色のフーラルのことは、いつまに
か頭から消えていた。

〈面積〉のいのこり授業が終わる日、堀内さんはさなえにむらさき色の色えんぴつをくれた。まだ半分もけずってい
ない色えんぴつで、いの？ とさなえがきくともうしゅうぶん書いたから、と堀内さんは言った。

「次は何色を使うの？」

「だいたい色かな」

「だいたい色もかわいね」

また算数のいのこり授業には来るの？ とはきかなかつた。堀内さんは〈面積〉だけ習いに来たのだということ

さなえは理解していた。

ろうかを歩きながら、さなえは、プリントを見せられたり、玉結びを教えてくれたりしてくれてありがとう、と言
った。堀内さんは、私もプリント貸してもらったし、と軽く肩を上げた。

「私、来年家庭科クラブに入るよ」

今まで考えたこともなかつたのに、堀内さんに話すことを探していると、そんな言葉がさなえの口をついた。けれど

も、それはさなえが本当に思っていることだとどうしようも気がした。

「そうかあ、私は卒業するけど、楽しいよ。がんばってね」

堀内さんがそう言うとき、さなえはものまごくさびしくなつたけれども、仕方のないことだし、不安になつたり泣きそ
うになつたりはしなかつた。

「あのやり方の玉結び、だれかに教えてあげるんだ」

「あれ、いいよね」

そう話しながら、さなえと堀内さんは玄関ホールを通つていった。図工の作品の展示は、一年生と二年生のものにか
わつていた。

校門を出て、二人が右と左に分かれて帰る場所まで来ると、さなえは勇気を出して堀内さんに告げた。

「あ、また家庭科室で家庭科クラブがいのこりをしてたら、私も中に入りたい？」

「もちろんいいよ」

堀内さんはうなずいて、じゃあね、と手を振つてさなえと反対方向に向かつて歩いていった。

さなえは、少しの間その場に立ちつくしたあと、また家に向かつて歩き始めた。家に帰つたら、自分も二年生まで使
つていた色えんぴつの使いさしを擦そう、と思つた。それで、むらさき色に合いそうな色を出して、明日からの授業の
プリントの大事などころを、むらさき色やその色で書くつもりだつた。フーラルの子たちにどんな目で見られても、そ

うしようと思つた。

自分自身のはこの作品、さなえの通う学校では、玄関ホールに図工の優秀作品が展示されている

(津村記久子「居残りの彼女」による)

問1 線a「どがつまる」ア 迷惑になる

イ がっかりする

ウ 緊張する

エ 混乱する

オ びくりする

ア 口から自然に出た

イ 口から自然に出た

エ 口から本心が出た

オ 口から迷いながら出てきた

問2 線1「おもしろがつているように見えた」とあるが、ここから読み取れることは何か。その説明として最も

ふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 堀内さんがさなえの指擦にたまごいなながらも、平静を保つとしていたこと。

イ 堀内さんが自身のうかつな発言を恥じ、取りつらおうとしていたこと。

ウ 堀内さんがさなえの細かい観察眼に驚いて、感心していること。

エ さなえが堀内さんの冗談を真に受け、親近感を抱いていること。

オ さなえが堀内さんの気遣いを感じ取り、少し安心していること。

問3 線2「さなえは、堀内さんの後ろ姿をながめたあと、いつもより少し背すじを伸ばして家に帰つた」とある

が、この時のさなえの様子を説明したのとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 堀内さんが苦手なことを克服するために周囲からどう思われるかを気にすることなく行動していることに感心

し、自身も意見を素直に述べられたことを誇らしく思っている。

イ 堀内さんが上級生であることに敬意を払うとともに、その堂々とした振る舞いに影響され、たとえ仲間はずれ

にされて弱気になつても、せめて姿勢だけは正そうとしている。

ウ 堀内さんが居残りに出ていた真相を打ち明けてくれたことに友情を感じ、彼女を見ながら、これからは

どんな状況にでも一人で立ち向かつていこうと決意している。

エ 堀内さんが他人の意向を気にせずに自分の苦手分野を克服する姿を見て、今後は友人関係の悩みにとられる

のは止め、勉強に集中しようと思つたと気持ちを改めようとしている。

オ 堀内さんが六年生と知つた時から感じていた疑問を伝えられたことに達成感を抱くとともに、今まで他人に合

わせてばかりいた自分の態度を改めていこうとしている。

問4

X

に入る表現として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ゆうきちゃんと大沢さんがいること

イ いすを傘分に持ち込むこと

ウ 四人席をきれいに埋めること

エ さなえがそこにいないこと

オ テーブルが美しい水色であること

問5 一練3「五時間目と六時間目はらくすつというわのそらだった」とあるが、この時のさなえの様子を説明した

たものとしてふくわいしないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア グループの子たちが、自分の本心を魔女のように見抜いていることを恐れていた。

イ 自分が思っていることを、どうすれば理解してもらえぬのが分からなかった。

ウ クラスや同年代の子たちと過ごす、今後の自分の学校生活が怖くなってしまった。

エ グループとの関係が、自分にとってそれほど大切なものではないことに気がついてしまった。

オ 平気なそぶりをしていたけれども、仲間はずれにされたことで実は深く傷ついていた。

カ 目の前に突きつけられた現実を受け止めきれず、何もかも考えるのを止めてしまっていた。

問6 一練4「どうしようと思っただ」とあるが、この時のさなえの心情を説明したものと最もふさわしいものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 堀内さんとの出会いから受け取った勇気を胸に、他者にこびることなく自由気ままに学校生活を送っている

と決意している。

イ 堀内さんの自由な生き方に強いあこがれを抱き、他者からの評価を気にすることなく忠実に自己表現をしよう

と決意している。

ウ 堀内さんと思いがけず親しくなれたことに自信を得て、これまでとは違う自分になるために新たな環境に飛び

こもうと決意している。

エ 堀内さんとの思い出や彼女の存在自体を支えにしなから、自分が本当はどう生きていきたいのかを探っている

と決意している。

オ 堀内さんとの交流で学んだ自己尊重の考え方を忘れずに、元々自分が持っている価値観を大事しながら生き

ていこうと決意している。

問7 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア さなえは、最初の場面では、新しい人間関係を築くことに不安ばかり抱いていたので、堀内さんと帰り道が通

うことを知って胸をなで下ろした。

イ グループのリーダーたちは、さなえを仲間はずれにしようとしたが、思いがけず彼女の気丈な態度に触れて拒

子抜けてしまった。

ウ グループのリーダーたちは、自分たちと距離を置くとするさなえの真意を察知し、彼女への当たりを強めて

いる。

エ さなえは、家庭科クラスでの交流を通じ、思いも寄らない価値観や方法を学び得て、今後は自身が教える立場

に立ちとうとしている。

オ 堀内さんは、さなえがむらさきの色えんぴつを欲しがっていたことを見抜いており、自身の勇気の証を託すこ

とでさなえの成長を願っている。

カ 堀内さんは、最後の場面では、自身と対等に話せるほど精神的に強くなつたさなえを見て、深い満足を感じて

いる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答の際は句読点等の記号も一字として数えること。なお設問の都合上、本文を一部省略した。

自然の風味を活かすことがあえて強く推奨され、一つの価値だみなされるようになったのは、そもそも、いつころ

からのことでしょうか。食卓から豊かな風味が失われてしまうのではないかとという危機感が抱かれるようになって

からです。このような危機は、近代化が始まって以来、多かれ少なかれ、たえず意識されてきたといつてよいでしょう

が、決定的な分水嶺となつたのが、第二次世界大戦後のいわゆる「豊かな社会」の誕生だと考えられます。

戦争を経て、技術革新にともなう効率化と画一化が飛躍的に進み、人類史に新しい局面がもたらされました。この

「豊かな社会」のプロタイプは一九五〇年代のアメリカ社会です。流通網が発達してスーパーマーケットにはさまざまな

まな商品が揃い、各家庭ではそれらを収納する冷蔵庫があり、大量のモノが消費されます。食はまあたらしい規格品に

なりました。それらは国の隅々まで行き渡り、多くのひとびとの空腹を平等に充たしましたが、同時に、家庭の伝統料

理を空洞化させました。従来あつた手触りと風味の多くが失われたのです。

一九六〇年代から七〇年代にかけて、大規模な対抗運動が生じます。行きすぎた画一化に反対し、自然の風味を回復

させることが特別な意味を持つようになります。公害問題も強く意識されました。この潮流を牽引したのが、いわゆる

「新カリフォルニア料理」です。環境に配慮し、小規模生産者が伝統的なやり方で作った食品を、新鮮なうちに食卓で

味わうべしとする「ファミ・トゥ・テイク」が標語となります。

私個人もここから、直接的、または間接的に大きな影響を受けてきました。自然を本格的に始めたときの座右の書が、

丸元誠生さんの料理本だったので、その著源の一つにも「新カリフォルニア料理」がありました。日本の高度成

長期に食の画一化が大規模に進み、家庭料理の伝統の多くが失われたのだと丸元さんは書いています。最新のアメリカ

の栄養学や、環境学の知見を援用しながら、新しい家庭料理像を描こうとしました。

ただし、丸元さんの教えもまさにそうだったので、対抗運動として生まれたこの新しい潮流は、しばしば、行き

すぎた純粋化にまで進みます。これは食べていけない、という線引きがほとんど厳格にな

つてゆく。実際、丸元さんの料理書には、「してはならぬ」という禁止項目が多く含まれます。数例を挙げるにどめ

ますが、白砂糖を使つてはならぬ、アルミの鍋を使つてはならぬ、電子レンジを使つてはならぬ。いわゆる健康志向が

昂じて、これを食えばあの病気が治る、というような因果関係の誇張——「フードフェイス」と呼びます——に訴え

ることもしばしばでした。料理の道徳化が起きたのだといつてもよいでしょう。

「ファミ・トゥ・テイク」も、その後の「スロート」も、重要な運動の標語であることは疑いありません。

しかしそれがひとの罪悪感に訴える、儼然な道徳に陥らないようになっているにはどうすればよいでしょうか。

(中略)

「ファミ・トゥ・テイク」の理念を世に広めたのは、シェ・パニースという名前小さなレストランを創業した

アリス・ウオーターズという女性です。彼女はカリフォルニア大学バークレー校在学中だった一九六〇年代の夏にフラ

ンス入留学し、食文化の豊かさに驚きます。それにひきかえ、アメリカ西海岸の食は、なんと規格品的で味気ないもの

になつていたかに気がされたのだそうです。そして、映画作家のマルセル・パニョルが南仏の古きよき暮らしを描い

た映画の中のうつくしい食堂の名——「シェ・パニース」を借りたレストランを開店するにいたります。こんなふうに、

何もない荒野にさと思えた場所に、フランスへの憧憬から作られた店が「新カリフォルニア料理」の起點だったことは

とても興味深いことです。規格品の食が習慣になりつあるアメリカ西海岸の街のただ中に、フランス食文化の飛び

地が作られたということです。

シェ・パニースで食べるのは、当然、フランスで本物のフランス料理を食べるとはちがう経験です。ただし、フラ

ンス未満の偽物の味ではありません。シェ・パニース体験とは、アメリカのフランスというキヤッツを味わうことを意

味していたからです。まあたらしい差異の経験が問題だったので。

そういつつ、わたしはシェ・パニースに行つたことにはないのですが、カリフォルニア州のロサンゼルスに滞在した

とき、「新カリフォルニア料理」の後継世代が作つたお店のいくつかで食事をすることができました。私にとつて印象

的だったのは、やはり、アメリカの超近代的な都市環境の真ん中で、あきらかに周囲と異なる食文化の伝道がなされて

いるということ、その激しいギャップでした。フアストフードの海に浮かぶ孤島でもいろいろな印象なのです。

ロサンゼルスには、「新カリフォルニア料理」のお店だけではなく、外国のさまざまな伝統料理のお店も同列に存在し、いわゆるスローフードの選択肢⁴となつていきます。フアスト製の超近代都市の中にいきなり出現する日本料理店

イタリア料理店、メキシコ料理店、韓国料理店、等々もまた、孤島のように浮かんでいるかんじがしました。でも、そこに特有のおもしろさがあります。アメリカのフアストな食環境から「ギアチェンジ」して、スローな時間の流れる別

の食環境の飛び地⁴に入る。ロサンゼルスは、地球上の異なる地域にルーツを持つ移民たちが、それぞれのテリトリーを囲つてきたパッチワーク都市⁴だといわれています。いわば、複数の小世界が一つの都市に折り畳まれている。

私がカリフォルニアのスローフード店に魅力を感じるのは、ビョアであるからとか、ナチュラルで、栄養学的に理想的だからというだけではありません。世界の別な地域にルーツを持つ食文化（シェ・パニースであれば南仏的農村共同

体）を映す点です。

⁴「素材の風味を活かす」という理念は、何か薄らかたで正しいものへ漠然⁴と向かつてゆく、と理解するだけでは不十分で、おもしろくありません。風味は、いまこにはない、異質な世界の索引⁴であり、紐ついた先の世界の映像をあり

りと喚起する点に価値があります。映すのは自然環境の変化だけではなく、シェ・パニースはワルセル・パニョルの南仏を映すものでもあります。外国映画のように。アメリカ的近代都市は、たとえるならばその多種多様な風味に

よつて、さまざまな地域、さまざまな時代の食文化を映す、超巨大ワルセルパニース・シアターなのだといえます。私たちはその一つの映写室に閉じこもるだけではなく、互いに行き来し、そのおがいをおもしろがるすることができます。

（三浦哲哉「盲炊者になるための36週」による）

* 分水嶺：物事の方向性が決まる分かれ目のたとえ。

* フロタイン：鳳梨、最初のもの。

* 南仏：フランス南部地域。

* ギヤンブ：陣たり、差舞。

* フアスト：速い、手軽な。

* パツチワーク：つきはき、寄せ集め。

* 索引：内容をわかりやすくまとめたもの、見出し。

* ワルセルパニース・シアター：同一施設に複数のスクリーンをもつ映画館、シネコン。

問1 線1「豊かな社会」の誕生」とあるが、それによつてどのようなことが起こったか。それぞれの解答らん

に入る言葉を本文中から二十字以内で抜き出して、次の説明文を完成させなさい。

A 二十字以内

が進み

B 二十字以内

ことに対する危機感が生まれた。

問2 線2「料理の道徳化」とはどういうことか。解答らんに入らせて二十字以内で説明しなさい。ただし「ル

ル」という言葉を必ず用いること。

料理について、

二十字以内

こと。

問3 線3「規格的な食が習慣になりつつあるアメリカ西海岸の街のただ中に、フランス食文化の飛び地が作

れた」とあるが、こうした様子を比喩⁴によつて表している部分をこれより後の本文中から十五字で抜き出しなさい。

問4 線4「素材の風味を活かす」とあるが、筆者は「風味」のどのような点を重視していると考えられるか。解

答らんに入らせて十文字以内で説明しなさい。

十文字以内

に触れさせてくれる点。

問5 筆者はアメリカの近代都市のどのようなところに魅力を感じていると考えられるか。それぞれの解答らんに入る

言葉を二十字以内で考えて、次の説明文を完成させなさい。

ロサンゼルスのようなアメリカの近代都市には、

A 二十字以内

ため、

B 二十字以内

を楽しむことができるところ。

三次の問いに答えなさい。

問1 ①～⑥の文中にある一線のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。ただし、カタカナに送りなが

含まれるものはひらがなで送りながも答えること。

① 好きな異物をお皿に毛ル。

② 宝くじが当たったことをミソにする。

③ 仲間同士でキロンを尽くす。

④ 恩師の教えを心にキザム。

⑤ 日が暮れてきたので家路を急いだ。

⑥ 友達の車に便乗させてもらう。

問2 ①～⑥の□にひらがなを入れ、それぞれのことわざ、故事成語を完成させなさい。

(1) そのときに、□～Fに入るひらがなを、それぞれ答えなさい。

(2) □～Fのひらがなを並べかえると、ある四字熟語が出来上がる。その四字熟語の意味として、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 努力し続けても意味がないこと

イ たいしたことはないと思ってしまうこと

ウ 相手の存在価値を認めないこと

エ 人の意見を心に留めずに忘れること

オ 私的な感情を持たず平等なこと

① 案□□□□差 A □□□□易 B □□□□

② 饗食 C □□□□好 □□□□好 □□□□

③ 雨□□□□石 □□□□C □□□□

④ 二度□□□□D □□□□D □□□□三度 □□□□

⑤ 好□□□□D □□□□物 □□□□上手 □□□□

⑥ 青夫□□□□E □□□□□□□□

⑦ E □□□□□□□□明 □□□□□□□□蛙

⑧ 石橋□□□□□□□□F □□□□□□□□渡然 □□□□

⑨ 豆腐□□□□□□□□□□□□□□F □□□□□□□□

(実際にやってみると、事前に心配していたほど難しくないので)

(好みというものは人それぞれだということ)

(小さな努力でも続けていると、最後には成功するということ)

(物はくり返して廻りかちであるということ)

(好きなものは自分から努力し勉強するので、土曜早いということ)

(まったく早期しかかった突然の出来事ということ)

(困難な状況に直面し、身動きが取れなくなってしまうこと)

(用心の上は、さらに用心をすること)

(言って聞かせても手こたえがなく、少しも物目のないこと)

[以下 余白]